

第1特集 電気自動車とスマート社会

第2特集 ドル安でゆがむ世界

週刊エコノミスト

11/23
特大号
2010

日産リーフ12月発売

EV覇権

グーグル、パナソニック、IBMの野望
虎視眈々 中国BYD、韓国CT&T、独シーメンス

スマートグリッドの蓄電装置

トップに聞く 日産・志賀 俊之、三菱自・益子 修

ドル安でゆがむ世界



CPI (米公認会計士資格) を取得。
日本企業の内部監査を担当

短期連載
反骨の勝者②
ある中卒団塊のアメリカ成功物語

露大統領国後訪問の本質
言論管理される温家宝首相

エコノミスト
レポート 環境保護と経済成長を両立させるドイツ

毎日新聞社
特別定価650円

二

ニューヨークの5月は素晴らしい。一斉に春がやってくる。花々が咲きリズは動き出す。石井静太郎のフィアンセは、新しい季節の訪れとともにケネディ国際空港に到着した。

2人の新しい生活が、ニューヨークの半地下の部屋で始まった。結婚式を挙げたのは1972年9月。石井が渡米して1年が過ぎていた。結婚式と前後して、石井はマンハッタン島の南にあるペース大学の会計学科に入学。勉強のため、居酒屋「亀八」のアルバイトは夜だけにした。

新妻は、ゲイが経営するニット工房で働き、毎日ニット服を編んだ。石井は深夜の12時に帰宅すると、毎晩宿題と格闘した。妻はタイプを打って、彼のレポート作成を助ける。入学するのが難しい日本と違い、アメリカの大学は入るのは容易だが、卒業するのが大変だ。本気で勉強しないと単位が取得できない。新婚生活を満喫する余裕はなかった。

ジョン・レノンのサイン

ニューハンプシャーの片田舎と違い、大都会のニューヨークには日本の若者がたくさんいた。貧しい青年が多く、勉強よりも日々の生活に追われてアルバイトが中心となっていく。このため当初の夢から離れてい

反骨の勝者

【第2回】

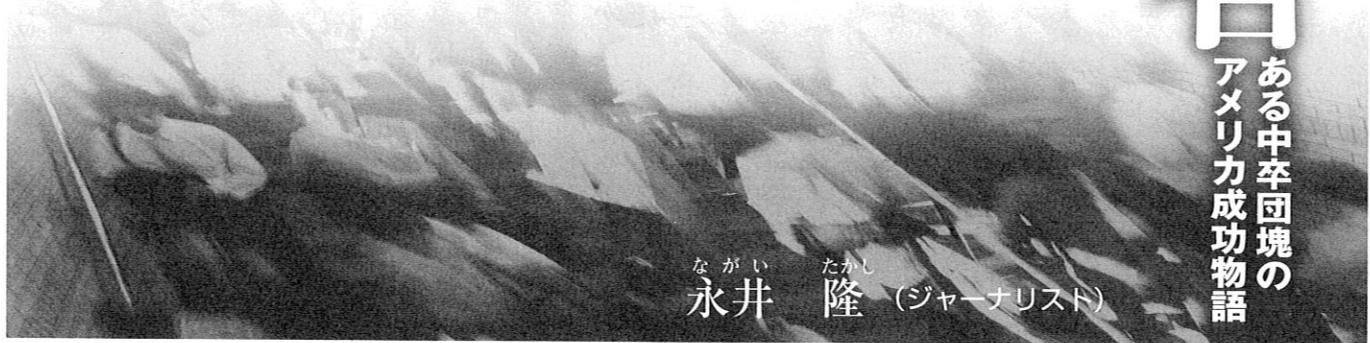
ある中卒団塊の
アメリカ成功物語

走りながら鍛えられ、 出会った「運命の人」

石井静太郎

元米アプライド・マテリアルズ副社長

渡米して1年後、日本に残っていたフィアンセをニューヨークに呼び寄せ結婚。妻帯者となった石井は、世界からビジネスエリートが集まる大都市で成功を求めて猛烈な競争を始める。CPA（米公認会計士資格）取得を機に進路は大きく変わっていく。



ながい たかし
永井 隆 (ジャーナリスト)

く者が少なくなかった。
当時を石井自身が振り返る。

「アメリカでは『何がしたいのかが分からない』と厳しい。1度決まったレールに乗ると、あとはゴールまで1本道という、日本とはまるで違う世界だ」

では、当時の石井に「何がしたい」が明確にあったのかと言えば、実はそうでもない。反骨心が生む勢いで突っ走っていたのが本当のところだったろう。

「走りながら、鍛えられていったと思う。鍛えられ、強くなっていた。僕自身は日本的ないい学校に入り、いい会社に入る」という本線からは外れていた。渡米当初の時点でアメリカが素晴らしいと感じたのは、機会の平等。日本が、無競争の平等だったのに対し、アメリカは競争のなかで平等が存在していた。差別はもろろんあったが、やる気のある人、できる人にチャンスはフェアに与えられた」（石井）

アルバイト先の亀八は繁盛していた。そのためオーナーは日本料理店を新たに outlet。石井は新店に移った。

新店には、日本びいきのジョン・レノンがヨコ夫人と一緒によく訪れた。配膳をする石井は、ジョンから可愛がられる。サインするのが大嫌いで有名だったが、石井の要請には快く応じた。

さらに石井にジョンは、失敗談を冗談交じりに披露することさえあった。

「マディソン（スクエアガーデン）で、ヨーコたちとチャリティーコンサートをしたとき、昔の曲をやったんだけど、歌詞を途中で忘れてひどい目にあったよ。僕が、ローリングストーンズにいたとき、つくったやつさ」

ジョンは神格化されていたが、接してみると気さくな人柄だった。残念ながら、ジョンからもらった貴重なサインは、四散してしまった。

猛勉強でCPA取得

76年、石井はペース大学を卒業。同時に当時、ニューヨークの8大会計事務所の一つである「ピート・マコーウィック&ミッチェル（略称ピート、現KPMG）」に就職した。年俸は2万ドル弱（1ドル＝290円で約580万円）。3歳になった石井は、ようやく大卒者の標準的な初任給となった。

76年は、巨匠マーティン・スコセッシ監督の手による、映画「タクシードライバー」が公開された年だ。ニューヨークに漂う、独特のカオス（混沌）が見事に描かれていた。カオスと暴力に溢れたこの大都会に日本企業は相次いで支店や支社の拠点を

開設していた。邦銀では、それまで東京銀行（現三菱東京UFJ銀行）しかなかったのが、他の都銀や地銀、さらにメーカーや商社がこぞつて米国市場に入ってきた。第1次オイルショックを乗り越えた日本企業は、世界経済の中心へと歩を進めていた。日本の経営が称賛を浴びていく前夜に、この時期は当たる。

ピートは、日本企業向けの営業に早くから着手していて、石井への期待は大きかった。かつてNEC三田工場で試作品をつくっていた石井は、ここで日本人のビジネスエリートと渡り合うことになる。それはエキサイティングであり、ビジネスを覚える格好の練習場でもあった。

77年に破綻する総合商社の安宅産

業（破綻後、伊藤忠商事に吸収される）もピートのクライアントだった。破綻の原因となったカナダの石油精製プロジェクト（76年春に、カナダ・ニューファンドランド政府により破産宣告された）に対し、日本の監査法人と異なり、ピートは「不適格」と監査報告していたことに、入社したばかりの石井は感銘を覚えた。

仕事以上に石井が真剣に取り組んだのは、CPA（アメリカの公認会計士資格）取得だった。働きながらの勉強だ。食事中、入浴中でさえ過去のCPA試験問題に取り組み、どうしても観たいフットボールの試合はテレビの前で勉強した。睡眠時間は3時間の日々が続く。「妻に励まされ、協力のお陰」（石井）で、79年に

CPA登録にこぎつけた。

「日本の公認会計士試験と比べれば、CPAの方が試験は簡単。日本では試験を難しくして、会計士を増やさないようにして有資格者の既得権益を大きくする。だが、試験に強い人が、優秀な会計士かどうかは別。安宅産業の事案がいい例だ。アメリカは試験はやさしい代わりに、資格をとってからが本場の勝負」（石井）

日本企業の内部監査を担当

石井はピートでの経験とCPAをさらに生かす場として、79年にニューヨークに本社をもつ巨大コングロマリットのガルフ・ウェスタンに転職する。ガルフがもつ関係会社は500社以上に及び、いつも企業の買収と売却とを繰り返して利益を上げていた。一種の投資会社だ。

日本では当時、セガ・エンタープライゼズをはじめ、ベッドメーカー、コネクタメーカーなどを傘下に収めていた。後にこのセガ株をCSKが取得している。

ガルフでの石井の仕事は、所有する日本企業の内部監査だ。CPAを持っていてのは仕事に就く前提であり、年俸はピートの2倍の約5万ドル（円は強くなり1ドル＝200円で約1000万円）に上がった。

住居はニューヨークだったが、石

結婚式は質素だった（1972年9月）





井は多くの時間を日本のホテルで過ごす。帝国ホテルやホテルニューオータニが定宿だった。面談で対峙する日本人は役員クラスばかり。50代、60代、時には70代の経営者が、豪華な応接室でまだ30代前半の石井のチェックを受ける。経営数字だけではなく、ゴルフ本社の方針に沿って事業を展開しているか、ガバナンス(統治)や財務、人事、さらに企業文化までを石井は監査してまわった。

アメリカ本社が出資する日本企業の管理の仕方を知ることができ、新鮮さを覚えた。石井にネガティブなレポートを書かれれば、クビにつながりかねないだけに日本人の経営者たちは必死だった。ゴルフはキャピタリスト(投資家)そのものであり、日本企業に求めるのは、結果だった。そのための人事システムが構築され

機能しているかを石井は確認した。人生には幾度か転機が訪れる。石井の場合は25歳になったばかりの71年9月の単身渡米が、その後の人生を大きく変容させた。34歳を目前にした80年7月、石井は再び転機を迎えた。

ゴルフ傘下の日本企業訪問のため帝国ホテルに滞在中だった。朝食を済ませた石井は相棒であるニューヨーク出身のユダヤ人、デイビット・ルビンとコーヒーを飲みながら新聞に見入っていた。

突然、ルビンは声を上げた。「サム(石井の愛称)、この会社(の採用試験)を受けてみる。セミコンダクター(半導体)は、第2のプラスタック、間違いなく伸びるから」

ルービンが指さしたのは、英字新聞に載っていた半導体製造装置メーカー、米アプライド・マテリアルズ(AMAT)の日本法人、アプライド・マテリアルズ・ジャパン(AMJ)の求人広告だった。石井にはその気はなかった。AMJもAMATも、まったく知らない会社だったからだ。ところがルビンは執拗で応募のための書類を勝手に揃えてしまった。仕方なく石井が投函すると、数日後に面接のための来社を求められた。たまたまその日があいていたため、物見遊山で石井は応じた。

新宿駅南口から甲州街道を初台方

面に歩いていくと、大きなガスタンク(現在は新宿パークタワー)があった。梅村ビルは、ガスタンク近くの小さな雑居ビルである。かつて住んだクイーンズ区のアパートよりも、石井には薄汚く見えた。甲州街道も、その上を走る首都高もトラックや車はひっきりなしに走っている。汚いのは排気ガスがひどいためかもしれない。

小さな階段を上り、茶色いドアに辿り着いた。「来るんじゃないか」。心の中で舌打ちするが、ホテルに帰っても今日は仕事はない。「10分も話せばいいか……」。逡巡しながら古いドアノブを回した。この瞬間から、石井の新たな人生が始まる。

岩崎哲夫との出会い

梅村ビルを後にしたのは、2時間以上も経ってからだった。石井の心は前年の79年に設立したばかりのAMJにあり、2時間前に息ぐるしく感じた甲州街道の排気ガスさえ、清々しく思っていた。

石井を待っていたのはAMJ社長岩崎哲夫。石井と同年の岩崎は、多くの団塊世代と同様に学生紛争に身を投じ挫折を経験して、ビジネスの世界に入っていた。ただし、学生時代の自己を変容させて、大企業に入社し企業戦士に転身した団塊たち

とは違う。本物の起業家だったのだ。「この人に俺はかなわない」と石井は観念した。理由は、岩崎が大きなビジョンをもっていたから。本来は石井への面接だったが、岩崎は語り続けた。半導体の将来性、AMJをコアにAMATを成長させていく野望、日本国内にテクニカルセンターを建設する計画があり、神奈川県千葉に用地を物色していること……。

埼玉県坂戸の中学を卒業しNECで働き、渡米して苦学しながらCPAを取得した石井には、誰にも負けない反骨心があった。が、岩崎のような将来につながるビジョンはなかった。石井はまさに雷に打たれた思だった。

この当時石井は、ニューヨークや東京で日米の経営者に数多く接していたが、岩崎は彼らとは器が違った。強力な磁力さを感じる。事実、岩崎はその後、1兆円を超える多国籍企業に成長するAMATでトップ5に入るほか、世界最大の半導体メーカーになる韓国・サムスン電子で外国人初の社外取締役就任。もちろん、この時点で30代前半の2人には、夢想だにしないことだったが……。

「一緒にやろう、石井さん! あなたには人事と財務の責任者になってほしい」

岩崎は石井の能力を見抜いていた。(以下次号)